

随想

かぶきもの、前田慶次郎

株PQC研究所 加藤 宏光

傾奇者という言葉は何かしらの魅力を持つ。著者が傾奇者の典型である「前田慶次郎、利太（とします）」に触れたのは、隆慶一郎になる『一夢庵風流記』という時代小説を読んだ三〇年あまり前のことになる。

ここに挙げた小説は、傾奇者として大活躍した時代の寵児・前田慶次郎を主人公とした、活劇風小説である（注1）。

この小説はその後、原哲夫氏らによる漫画『花の慶次』（注2）として一時代を風靡している。傾奇者が自分を貫きながら時代を生き抜く痛快な物語であり、反骨の何たるかを思わせて、大いに共感を呼び、ついつい三〇冊も四〇冊も買い込んで親しい人々へ配ったものであった。

この本に接した時はすでに文庫本が発行され、ハードカ

バーのオリジナル本は書店には見当たらなかった（初版、一九八九年、著者が入手したのは、一九九一年以降）。

最初二〜三冊しか棚になかったこの本が、著者が三〇冊、さらに一〇冊と買い足すうちに、その棚に一〇冊以上が並べられるようになっていて、それを見たととき、笑ってしまった。

『傾奇者』と聞いただけで何かしらワクワクしてしまうのは、権力に迎合しないで生き抜いた、その人の生きざまに共感するからと思われる。つまりは、多くの迎合者、その中には、多分、生きるためにやむなくそうしている自分も含まれる迎合者の歯がゆさや、いら立ちを、傾奇者の生きざまで「このように生きたい!!」と思うことで慰めているのである。

この本を配った友人・知人の

多くから「のめり込むほどに共感した!」という読後感を頂いたことから、多くの人々の心には、著者と同様の感情が働いているのであろう。

さまざま逸話の中に『秀吉に許された「天下御免の傾奇者」と名乗る』というものがある。小説でも、劇画の中でも、慶次郎の婆娑羅振りを見せているのであり、何回読んでも彼の破天荒ぶりに心を躍らせた。

それから、一五年もたった頃、NHK木曜時代劇の『かぶき者慶次（注3）』で、彼の晩年の生きざまが映し出されている。

話は飛ぶが王陽明（注4）という人物がいる。わが国にも大きな影響を与えた『陽明学』を打ち立てた偉人であり、朱子学に対する哲学としてわが国に少なからず影響を与えた陽明学を打ち立てた人物である。

注3・・・かぶき者慶次は二〇一五年にNHK総合テレビで、藤竜也を主人公役に据えて放映された晩年の慶次郎の物語。石田三成の遺児を匿い育てた、としている。

注4・・・中国明代の儒学者・高級官僚。思想家として当時の朱子学に対して批判的であり、さらに発展させた。聖人になるに当たり、四書五経を代表とする書物を通し物事を窮めることにより、理を得ていくのではなく、理は元来より自分自身に備わっており物事の探究の結果得られるものではないとし、陽明学を起こした。一方で武將としても優れ、その功績は「三征」と呼ばれている。

一つ目は正徳十一年（一五一六年）から五年かけた、江西・福建南部で相次いだ農民反乱や匪賊の巡撫・鎮圧。軍、民兵を組織してこれらをことごとく鎮圧、民政にも手腕を発揮し治安維持に務めた。

二つ目は正徳十四年（一五一九年）六月に明の宗室が起こした寧王の乱。反乱に向けて準備を進めていた寧王軍を僅か二か月足らずで鎮圧した。

三つ目は嘉靖六年（一五二七年）に広西で反乱が起きると、その

討伐の命が下った件である。王守仁は辞退したが許されず、病（結核）をおして討伐軍を指揮し、それらを平定し事後処理を進めた。帰還命令が出ない中、独断で帰郷を図ったが、その帰途、病が重くなって南安府大庾県（現在の江西省贛州市大余県青龍鎮）の船中において五七歳で死去した（Wikipedia）

注5・・・一九七三年、第一二代將軍・徳川家齊の次男として江戸城で生まれる。第一二代征夷大將軍（在職一八三七年〜一八五三年）また老中首座・水野忠邦を重用し、天保の改革を行わせた。家慶政権期には言論統制も行なわれ、高野長英や渡辺崋山等の開明的な蘭学者を弾圧した（畜社の獄）オランダ国王ウィレム二世の開国勧告を謝絶し、阿部正弘の意見を容れて海防掛を常設させる等していた家慶だったが、嘉永六年（一八五三年）六月三日、アメリカのマシュー・ペリーが四隻の軍艦を率いて浦賀沖に現れ（黒船来航）、幕閣がその対策に迫られる中、六月二十二日に薨去（Wikipedia）

徳川一二代將軍・家慶（注5）は、何事につけても、家臣のいうことに対して「そうせい」と答えたため、「そうせい様」と呼ばれたというが、この時代は、江戸時代二六〇年でも至極